京都大学言語学懇話会
2004–2005 年度 活動報告

例会報告

第 66 回例会

日時・場所　2004 年 12 月 11 日 (土) 13:30–16:45 於京大会館

研究発表　「スペイン語における使役構文の統語構造について」
藤田 健 (北海道大学)

「新出のソグド語碑文をめぐるソグド語言語学・文献学の諸問題」
吉田 豊 (神戸市外国語大学)

第 67 回例会

日時・場所　2005 年 4 月 9 日 (土) 13:30–16:45 於京大会館

研究発表　「シベリア・ユピック語の従属法動詞を用いた従属節と主節における名詞項のレファレンシャリティについて」
永井 佳代 (京都大学)

「共感覚比喩における修飾の方向性 — 事象関連電位を用いて —」
坂本 勉 (九州大学)

第 68 回例会

日時・場所　2005 年 7 月 9 日 (土) 13:30–16:45 於京大会館

研究発表　「語順と音調 — Phase と素性の照合の観点から」
橋本 喜代太 (大阪府立大学)

「エスノシンタクスは可能か？— ジバーリ・アラビア語 (エジプト・シナイ半島南部) における再帰的倫理与格の創出をめぐって」
西尾 哲夫 (国立民族学博物館)

スペイン語における使役構文の統語構造について

藤田 健

ロマンス諸語における使役構文は、一般に他の印欧諸語におけるそれとは異なる統語的特徴を示す。すなわち、フランス語やイタリア語において観察されるように、使役動詞と補文の動詞である不定詞が隣接し、補文の主語である非使役者名詞句が不定詞に後続するのである。この際、補文の動詞が自動詞であるか他動詞であるかによって非使役者名詞句の標示が異なる。前者の場合は無標の対格で、後者の場合は前置詞を伴う与格でそれぞれ標示される。

これに対してスペイン語は、上記の構文と並行して、使役動詞と補文の不定詞が統語的複合動詞を形成しない構文も観察される点で特徴的である。

(1) a. Juan hizo abrir la puerta a Pedro.
made open the door to

b. Juan hizo funcionar (a) la radio.
made function to the radio

(2) a. Juan hizo a Pedro abrir la puerta.
made to open the door

b. Juan hizo *(a) la radio funcionar. (Torrego 1998)
made to the radio function

本発表では、最小主義アプローチの枠組に基づき、(1) の構文では、使役動詞と補文の動詞が統語的に複合動詞を形成し、項に対する格の認可が複合動詞の単位でなされると考え、次のように仮定する。

I) hacer は vP を選択する。補文の動詞は繰上げによって hacer と複合動詞を形成する。

II) a. 補文の動詞が自動詞である場合、補文の主語は通常の他動詞と同様、LF で主文の vP 指定部において格照合される。

b. 補文の動詞が他動詞である場合、二つのオプションが可能である。

i) 補文の主語が overt syntax で主文の vDP 指定部に移動し、前置詞 a によって与格を付与される。

ii) 補文の主語が降格され、前置詞句として生起する。

一方、(2) の構文では、使役動詞が選択する節は (1) と同様 vP であるが、使役動詞と補文の不定詞が統語的に独立していると考え、次のように仮定する。

hacer は vP を選択する。補文の主語は主文の vP 指定部に移動し、合成的に θ 役割を受け、主文の動詞句で格照合を受ける。

このように二つの構文に対して異なった構造を設定することによって、(2) のみにおいて観察される非使役者名詞句に対する意味的選択制限が自然な形で説明されると同時に、補文の動詞の直接目的語が代名詞クリティックの形で生起する場合の両構文におけるクリティックの統語的分布の相違も、特別な仮定をすることなく一般的な原理に基づいて簡潔に説明することが可能となる。 (ふじた たけし)

シベリア・ユピック語の従属法動詞を用いた従属節と主節における名詞項のレファレンシャリティについて

永井佳代

シベリア・ユピック語の従属法の動詞は，他の法の動詞と異なり，動詞に名詞項を１つしか標示しない．これまで，従属節にあらわれる従属法動詞の主語は主節の主語と同じであると主張されてきた（Jacobson 1990, 2001）．しかしながら，主節と従属法動詞の主語が同一ではない例が例外として片づけられないほど数多く見られる．そしてこれらの例を整理してみると従属法動詞に接尾辞 **-u** や **-uma** があらわれている場合が多くみられる．これらの接尾辞を手がかりに従属法動詞について考察したところ，以下のことがいえることがわかった．

(1) 従属法の動詞が他動詞の場合，従属法の動詞に標示される絶対格相当の名詞項は他動詞目的語（O）であり，他動詞主語は主節の主語（S/A）と同一である．一方，従属法の動詞が自動詞で，状態，あるいは動作の継続を表しているとき，従属法動詞の主語（S）は必ずしも主節の主語（S/A）と同一ではない．

(2) 従属法動詞にあらわれる接尾辞 **-u** と **-uma** は動作の継続を表し，他動詞を自動詞化する．

(3) これらの接尾辞が自動詞主語（S）と他動詞目的語（A）が交代する動作者的他動詞語幹に付加されて自動詞を形成する際，他動詞目的語（O）が絶対格のまま自動詞主語（S）となる受動の構文が観察される．

(4) この (3) で述べた受動の構文と，使役接尾辞 **-stə** を用いて従属法動詞に主節の主語と同一の上位の主語を置くことによって主節と主語を同一指示にする構文は，格の現れ方に注目すると，一見して同じ構造を持つように見える．しかし，一方は受動化された自動詞で他方は使役化された他動詞であるという全く異なる構造を持っている．（ながい　かよ）

エスノシンタクスは可能か？－ジバーリ・アラビア語（エジプト・シナイ半島南部）における再帰的倫理与格の創出をめぐって

西尾哲夫

西暦 6 世紀にビザンツ皇帝ユスティニアヌス I 世が聖カトリーヌ修道院を創建したとき、ボスニア（旧ユーゴスラビア南西部）、ワラキア（ルーマニア南部）、アレキサンドリア（エジプト）から二百家族余りの農奴を強制移住させて、修道僧の警護や身辺雑事にあたらせた。彼らの子孫が現在のジバーリ部族であるとされている。言語の面では、移住当初はラテン語の方言を話していたらしいが、徐々にアラビア語を話すようになった。

ジバーリ・アラビア語は、北西アラビア半島方言西部グループに分類されるが、孤立的方言特徴も多く持っている。これらの孤立的方言特徴のなかには、他の地域のアラビア語方言にも在証されない特徴もある。ジバーリ・アラビア語はピジン・クレオール的アラビア語という初期の言語形成過程を経て成立した言語の可能性が高い。本発表では、ジバーリ・アラビア語の孤立的方言特徴の一つである再帰的倫理与格について分析し、このような統語現象がいかに創出されたかについてエスノシンタクス（cf. Enfield, N.J. ed. 2002 *Ethnosyntax: Explorations in Grammar and Culture*. Oxford: OUP.）という立場から考察を加えた。

次の例文においては与格表現の「前置詞 *l*+接尾代名詞」が再帰的に使われており、主語とは別の対象を指示している。

kull wāḥid	ysawwi	lo	šey
everyone-S	make-(he=S)-Impf	to-him(=S)	thing-O

「すべての人は（自分で～自分のために～自分の責任で？）物事をする」

再帰的倫理与格をめぐる文法的使用パターンの通時的変化は以下のように推定されるが、このような文法現象の創出にあたっては、ジバーリ・アラビア語使用者の文化的認識が関与している可能性を指摘できる。

① sawwɛ [lo bēt] > sawwɛ [bēt-o]

② sawwɛ lo bēt > sawwɛ bēt ʻašān-o

③ [sawwɛ lo] bēt vs. sawwɛ bēt

（にしお　てつお）